

## 日本を耕す

大村市立玖島中学校 3年 赤川 明信

僕の夢は「日本の未来を明るくすること」です。僕は幼稚園の頃から日本地図や歴史のマンガを読むのが好きでした。二〇〇〇年以上続く歴史、多様な風土と文化、美味しい和食、大好きな長崎くんちなどなど日本の素晴らしさを知って「日本ってすごいなあ」と思うようになりました。小学校高学年になるとニュースにも関心を持ち始め、少子高齢化、過疎化といった大きな問題に日本が直面していることも知りました。僕はそんな日本の持つ大きな課題をどうにか解決したい、僕にはなにができるだろうと考えるようになりました。その答えは僕の家の中にあっただけです。

僕の父は消防署で働きながら、家業である農業にもはげんでいます。いわゆる兼業農家です。お米、はっさく、夏はなすびやきゅうり、冬は大根やはくさい、神棚に飾る榊までたくさんの種類の作物を作っています。そんな家に生まれた僕は、田畑の野焼きや農薬の散布、田植えなど休みの日はよく駆り出されます。手伝っていて感じるのは多くの作業に「キツイ」、「汚い」、「危険」の農業の3Kがあてはまることです。東になった藁や三十キロある米袋を担いで数十メートル先まで運んだり、田植えの時は足は焦げ茶色に染まり、時には顔まで泥まみれです。また、チェーンソーや草刈り機。油断して使ってしまうと命に関わる事故にもつながります。

これを考えれば、農業をしたいという若者が減っているのも納得してしまいます。僕は忙しい父からの「苗ば植えんばけんが、外に來い」といった言葉に聞こえないふりをすることもよくありました。僕はそれほど農業の手伝いをするのが嫌でした。

ところがある日、野菜の種を植えた数日後畑に水をやりに行くとき「すげえ」一つだけかわいい小さな芽が出ていました。これが、たったの二ヶ月で自分のふくらはぎよりも太くて、食べるとほんのり甘い立派な大根になるのです。植物の生命力は本当にすごいものです。そして、作物はその種や苗を植えて、手入れをする人がいなければ、成長することはできません。農業では作物を数ヶ月で「立派な大人」に育て上げ、いわば植物の「親」になることができるのです。

それ以来僕はよく植えた野菜をじっと見つめるようになりました。

「この前、植えた大豆がこんなに大きくなっている。」

見ていると本当に心が落ち着き、勉強の気分転換にもなります。僕はペットを飼ってないし、アニメやアイドルの「推し」もいません。そんな僕にとっては作物こそが自分を癒してくれるペットや推しに代わるような存在であり息子であり、一つの大切な命なのです。

また、僕はもう一つ気付いたことがあります。世間では3Kと思われているような仕事でも、農家のように感動や喜びを得たり、多くの人から感謝を受けて誇れる仕事なのではないかということです。だから父もツラくても、忙しくても仕事を続けられるのでしょう。

この二つのことに気付いてから僕の農業に対する考え方は大きく変わりました。そして、「日本の未来を明るくする」ということについて改めて考えました。

今、コロナ禍によってリモートワークが増えたり、副業が解禁されたり、多様な働き方が増えてきています。また、日本の食料自給率は二〇二〇年度カロリーベースで三七％です。これは外国と比べても、低い水準で農家の高齢化や若者離れで更に下がるかもしれません。耕作放棄地も増えています。我が家でも祖父がなくなってからは広い土地を父一人で管理しています。雑草は三ヶ月で伸び、落ち葉や枯れ木が落ちるので手入れは本当に大変で、限界だと思います。このような現状を踏まえ、僕は農業の新たな形への改革が必要だと考えます。ICTやAI、自動運転といった日本の誇る科学技術を用いて、農家の負担を減らして、他のことにもチャレンジができる「新しい農家の働き方」です。

僕はこれまで「絶対に将来農業には関わらない」「この田舎から解放されるまであと五年もあるのか」と思っていました。でも、農業の素晴らしさを知った今では、農業に関わり続けたいという思いが強くなっています。農業の感動、おもしろさを伝えていくことで、若者がワクワクしながら畑も日本の未来も耕していくそんな「未来」になるのではないのでしょうか。「新しい農家の働き方」それこそが「日本の未来を明るくすること」の第一歩だと信じて。